



学校だより

2月号

令和5年1月31日

副校長 高野 智彦

「私は、きのこが苦くてきらいだったけど、ちょっとずつ食べられるようになりました。」

これは、給食週間のときに、3年生の児童が調理員さんへ書いたメッセージです。二つ橋小学校では、全国学校給食週間に合わせて、1月19日から27日までを給食週間に設定しています。この給食週間の期間に合わせて、子どもたちが書いた給食に関するメッセージをあいさつ廊下に掲示しています。この他にも、「ピーマンが食べられるようになりました。」「魚が苦手だけど、ちょうせんします！」などの前向きなメッセージがたくさんありました。

私の息子も、牛乳が苦手で、家では一切口にしません。給食でも3年生までは毎日残していたようです。しかし、先生の声掛けや友達の応援により次第に飲み切る日が増え、今では毎日飲み切れるようになりました。相変わらず家では牛乳を飲みませんが、給食が、苦手な食べ物を克服するきっかけとなりました。

二つ橋小学校では、3人の調理員さんと、1～2人のアルバイトの方が協力しながら日々約500食の給食を作ってくださっています。調理員さんによると、冬場の給食室は気温が5℃ほどで、扱う野菜もひんやりと冷えており、とても体にこたえるそうです。給食室には、暖房機器が設置されていません。狭い空間でガスを使うので、窓を開け、換気扇を何台も回しているのですが、暖房機器が効かないのです。釜を暖めたときに伝わってくるわずかな暖かさが、唯一の熱源です。そのため、調理員さんは、特に冷える足元にカイロを貼り、調理をしています。

野菜や果物を洗うときには、冷たい水を使います。ミカンなどの果物は、傷んでいないかチェックしながら3回も水洗いをします。乾燥する季節は、調理、片付けが終わった後はハンドクリームをしっかり塗って翌日の調理に備えます。

子どもたちと調理員さんが直接関わる場面は、給食を取りに行くときと返却のときくらいしかありません。この給食週間を通して、改めて給食を作る大変さと、給食の大切さを知った子どもたちは、いつも以上に心を込めて「いただきます」「ごちそうさまでした」と調理員さんたちへ伝えています。

新型コロナウイルスの感染防止対策により、現在、全員が同じ方向を向き、原則として黙食を行っている状況です。5月には、感染症上の位置づけも見直されると言われています。また、以前のように笑顔で会話をしながら給食を食べる日が戻ってくることを願います。